

能代高

(35)

演劇は花ざかり

その名は“幸四郎”。歌舞伎役者、映画俳優になっても、本名のままいける立派な名だ。

天分を十分生かし、あこがれの舞台で活躍したのが渡辺幸四郎（新4期、俳優座7期卒、渡辺銘木店）である。スポーツ界に数多くの名選手を送り出した能高（能中）——同時に、文化芸術界にも優秀な人が巣立っていった。

おもしろいことに、渡辺は高校二年まで、テニス部で活躍したスポーツマン。

「有望な運動選手だな」

鈴木正昭先生は、当時（昭和二十五年ごろ）の渡辺をそんな

目で見ていた。鈴木先生は国語担当で、演劇同好会の熱心な指導者だった。

「やってみねが……」

渡辺は、友人に誘われて演劇同好会へ。そもそものは、実に軽い気持で演劇の世界に入った。

歌舞伎が好きだからこそ、わが子に“幸四郎”と名付けたのであろう。だが、息子が本当に演劇をやり出すとは……幸四郎の父も予想しなかった。

「河原こじきのマネみたいだこどやらがして……」

息子の“変身”には、ちよつぱり不満もあつたらしい。

「おや、リンドフォリスにどこか似てるな……」

演劇に熱を入れた渡辺を見て、鈴木先生は、スウェーデンの名女優を思い出した。男と女では違う。が、たしかにそんなふうに整った顔たちだ。



さし絵は吉武栄司（6期・能代北高教諭）

渡辺が高三になった年（二十六年）、演劇同好会が“部”に昇格。この辺の歴史は、野中堯先生も詳しい。渡辺の演劇熱がそこでいやがうえにも高まった。

能高の演劇活動は、渡辺より少し先輩、つまり佐藤融志（新2期、鴻文堂書店）の時代にしっかりと根をおろした。大先輩、佐藤長俊（16期、峰浜水沢小学校）の指導もありがたかった。佐藤のちに“市民劇団”をつくり、能代に“演劇の灯”をともした、“演劇の父”的存在である。

渡辺、清水竜郎（唐津）、古谷正之（淳城二小）らが高校演劇で活躍した年は、演劇部にとって、まったくついていた。

というのは、男女共学の実施で、男だけの学園に“花咲く乙女たち”が初登場。

「女」がいれば、なんたら劇

でもやれる……」

渡辺たちが喜んだのもムリがない。それまでは、淳城学院の女生徒に“客員”の形で応援に来てもらって、母親役をたのんでいた。演劇には、どうしても女生徒が欠かせない。

待望久しい女子。なにせ数が少ない“金の卵”だ。いろんなクラブから、引く手あまたで、スカウト合戦もし烈だった。

「オラほの部に、なんとが入ってもらいて……」

女子の教室まで直接出向き、渡辺は深々と頭を下げた。その真剣なまなざしが女子の心を動かした。演劇部は、最も多くの女子部員を獲得できた。

この時入部したのが、池端（杉淵）淳子（淳城二小）、伊藤（成田）恵（二ツ井町）、丸山（宮腰）範子（千葉県）ら。花の新制6期生だけあって“名女

優”ぞろいだった。

とっても親切で、親しみやすい先輩というのが池端が受けた部の印象。

「あまり、ごしやげば、やめてしまうんでねべがな」

やめられると大変。男子部員の気の使いようは、涙ぐましい限りだった。

苦心したことといえば、納谷哲太郎（秋木工業）は、頭の毛をのばす時、ハタと困った。クラスに長髪の生徒はいない。丸坊主では、サマにならない……結局、佐藤長俊先生に次のような証明書をわざわざ書いてもらった。

「芝居やるために、必要であるから……」

化粧用具も満足にない時代。ごくあたり前のこととして、チヨークの粉を顔にはたいした。能高で校内演劇コンクールが

始まったのも渡辺の時代から。

普通の手段では、関谷嘉門校長が許可してくれそうもなかった。一計を案じた渡辺は

「えー、北高の校長先生が能高でもそういうのやればいいといつてるす」

直談判でこういった。間もなくOKが出た。ここでも渡辺の演技力がモノをいった。

胸をときめかした北高と合同の演劇練習。発表会が終わったあと先生たちとくみかわした酒のうまかったこと。

五年前、能代に新しい演劇の灯がともった。故郷に帰った渡辺が呼びかけて“十一人の会”が生まれた。定期公演も好評。

手づくりの味がする演劇をいつまでもやっていきたい、と渡辺は夢をふくらます。（敬称略）